

『東亜連盟』誌復刻に寄せて

武田邦太郎

1、『東亜連盟』誌復刻

『東亜連盟』誌が創刊号（昭和14年10月刊）から最終刊号（20年10月）まで復刻、公刊されることになった。『東亜連盟』誌は石原莞爾先生が指導された東亜連盟運動の機関誌である。創刊された昭和14年10月、石原先生は舞鶴要塞司令官であり、先生は表立って、運動を指導される立場になかった。先生が運動に打ち込まれたのは、昭和16年3月、第16師団長（京都）を最後に現役を去り、6月、東亜連盟協会（木村武雄代表）顧問となり、9月、郷里の山形県鶴岡市に帰られてからである。

初期のころ、東亜連盟運動はこの運動の趣旨に賛成する政治家、社会運動家、学者等を主体とする運動であったが、石原先生が直接、運動を指導されるようになってから、運動は東亜連盟思想による国民運動、国民組織運動になった。即ち、中国に対する侵略戦争、朝鮮に対する植民地政策にピリオドを打ち、満州国の植民地化に反対し、民族協和の東亜連盟の結成を目指す内外一途の革新運動として、やがて政治運動に展開すべき性格を内包することとなった。それが『東亜連盟』誌の内容に際立った変化をもたらしている。

東亜連盟結成に関する諸政策が整備され、これを実現する主体となるべき同志組織が整備されたならば、東亜連盟運動は思想運動、国民運動から政治運動へ飛躍、展開することが期されたのである。太平洋戦争末期には、日本国内でも、朝鮮、満州国、中国でも、同志は東亜連盟運動が一日も早く政権獲得に向けて前進すべきとする熱願に燃え立っていた。

東亜連盟運動は、日本史上極めて運命的な太平洋戦争期に、石原先生がその全身をもって歴史に刻まれた事蹟であり、先生の生涯においても満州事変、満州建国と並び、或いはそれ以上に重大な意義をもつ歴史的な事蹟である。それは過去の事実であるよりも、より多く、今後の東亜諸国のあり方、ひいて世界のあり方に高き歴史的指標を提示しつつある。いま東亜諸国はもちろん、世界の国際政治は空前の激動期、混乱期にあるが、この時期に『東亜連盟』誌全巻が復刻、公刊されることの意義はまことに深甚である。

曹寧柱先輩の助言

復刻の議が起こるや、東亜連盟運動の後を継ぐ、石原莞爾平和思想研究会（渡辺正会長）の運営委員会におはかりしたところ、一人の反対もなく賛成されたが、石原門下の先輩、曹寧

柱氏はとくに私を招いて次のような助言を寄せられた。

『東亜連盟』誌に寄稿された人々は、石原先生はもちろん、多くの人々があの苛烈な軍閥政府の弾圧下に、筆を曲げることなく所信を吐露された。それだけに論者一人一人、それぞれの段階で非妥協的論説を展開された結果、石原先生の経論に必ずしも完全には一致しない主張も絶無ではない。しかしそのような主張を表明された方がたも、時たつにつれて、究極において石原先生の説かれるところに推服されている。『東亜連盟』誌の復刻は、東亜連盟運動における同志間、指導者間の思想的統一と高まりが運動の進展とともに前進していることを証明するであろう。復刻に当たりそのことを一言しておいてはどうか」

曹先輩自身、あの東亜連盟運動の受難期に、寸毫も節を曲げることなく、2年余りの投獄、拷問を経験されたのであった。いま先輩の右の助言に接し、心からの敬意と感謝を捧げずにはいられない。曹先輩は石原莞爾平和思想研究会の顧問であり、私もそうである。

2、石原莞爾、生涯の五期

現代歴史学、或いは一般通念においては、石原先生は満州事変、満州建国の首謀者の1人、昭和における大陸侵略の先駆者とされている。しかし石原先生に対する現代歴史学ないし一般通念の評価は、先生の生涯に対する或る時期の、しかも外面だけをとらえた認識にもとづくものである。しかし、石原先生の真実は、先生の全生涯にわたる内的生活と公的な行動を、歴史的現実の展開に関連させて考察するとき、始めてわれわれの眼前に浮上するであろう。わたしは石原先生の生涯を、次のような五期に分けて考えることが適当ではないかと思う。

第一期

青年士官のころ——その中心的時期は歩兵第65連隊（会津）期——からドイツ留学、陸軍大学校教官を経て、関東軍参謀として赴任するまで。すなわち明治42年（1909）ころから昭和3年（1928）10月まで、およそ20年間。先生の生誕は明治22年（1889）1月であるから、20歳ころから39歳までである。

この間に、石原先生は戦争史の法則的研究を通じ、戦争の撲滅、永久平和近しとする総合史観を確立し、一方、先生が神に最も近い存在と確信した兵に、いかにして安心の境地における戦死を可能にさせ得るかという煩悶から、永い思想・信仰の遍歴の末、日蓮教の信仰に到達する。先生の戦争史研究は、日蓮教の信仰によって不動の目標を与えられた（『戦争史大観の由来記』および『戦争史大観の説明』参照）。また、日蓮聖人の予言により、永久平和

の関門として日本を中心に起るべき最終戦争、或いは最終戦争への準備として不可避の戦争以外では、兵を感激を持って死地につかせることは出来ないとの心境に達する。後年、先生は主としてこの見地から日中戦争や太平洋戦争の回避に全力を傾注されるのである。第一期は、思想・信仰の基礎が形成された時期である。

第2期

関東軍参謀になってから、歩兵第四連隊長（仙台）、参謀本部作戦課長、同戦争指導課長、同作戦部長を経て、昭和12年（1937）9月、関東軍参謀副長としてふたたび満州へ赴任するまでの約9年間、軍人として全力をあげて活動した時期である。39歳から48歳まで。満州国建国以後、国防に関する先生の努力は、ソ連の南下に対して東亜を防衛し、日本、朝鮮、満州国、中国等を主体として、米欧に対する最終戦争に必勝を期する東亜連盟の結成に注がれた。しかるに現実の日本はソ連に対する防衛を忘れ、石原先生を参謀本部かせ去らせて、中国侵略にひた走る。軍人としての先生の活動盛期は、事実上、この時期に始まり、そして終る。

第3期

関東軍参謀副長に転出してから、舞鶴要塞司令官を経、昭和16年（1941）3月、第16師団長（京都）を最後に現役を去るまでの役3年半。石原先生の生涯では、おもに東亜連盟運動ないし日蓮教運動に入るための準備期という事ができる。48歳から52歳まで。

関東軍参謀副長期には関東軍司令官の満州国内面指導の撤回、満州国の完全独立に力をつくし、京都師団長期には極東ソ連軍に対処するいわゆる「浸透戦法」を開発し、また師団の北満移駐について軍の物心両面にわたる準備に肝胆を砕いた。しかし、このような先生の努力はすべて実を結ばなかった。この時期、現実には意義をもち得たのは、第四期以後に対する準備である。それだけに、精神的活動は白熱的に高揚し、仏教史上に一時期を画する「五五百才二重の経論」は、多くの評伝に「石原は配所の月を眺める身となった」と記される舞鶴要塞司令官期に啓示されている。東亜連盟運動の最高指導書となった『昭和維新論』『東亜連盟建設要綱』『最終戦争論』『戦争史大観の由来期』『戦争史大観の説明』等もこの時期に出来ました。

第四期

京都市団長を退いて以後、昭和21年（1946）1月、東亜連盟運動が占領軍事司令部から解散を命じられるまでの約5年間、52歳から57歳まで。信仰者、平和者、組織運動の指導者

としての石原先生の実践的活動が最高潮に達し、かつみごとに結実した時期である。運動の目標は『最終戦争論』にもとづく東亜連盟の結成にあたったが、当面は日中戦争、太平洋戦争の早期和平と農村の再建を目指した。太平洋戦争末期、全国の地方組織は74を数え、約20万人の同志は政権獲得の近いことを確信しえたのであり、先生の生涯における最も重要な一時期をなしている。

昭和20年（1945）9月12日、山形県新庄市に開催された東亜連盟同志会の集会は、同志約1万人を中心に参加者3万人余の大集会となり、永久平和実現に先駆する新日本建設を説かれる石原先生の所説に傾聴し、来年は富士の裾野に同志百万人が集まろうといわれる先生の呼びかけに熱狂呼応した。

第五期

昭和21年10月、石原先生は山形県遊佐街（当時は高瀬村）西山開拓地に入る。以後24年（1949）8月の死にいたる、57歳から60歳までの約3年。日蓮教信仰に集う青年男女の団体、精華会（大正9年以後、先生が所属していた国柱会の青年部）を指導し、死後のための著述を残し、後進の教育に精魂を傾けた。敗戦後からこの時期にかけ、石原先生は『最終戦争論』に重大な修正を加え、最終戦争を回避しつつ永久平和を実現すべき世界の立正安国に向かい、日蓮教の旗印を高々とかかげられた。死の前年、昭和23年11月24日、門下有志の求めに応じて撮影された16ミリ『立正安国』は、先生の最後の姿を如実に今日まで伝えている。

石原先生が東亜連盟運動に挺身されたのは、先生の生涯の第四期、現実的活動の最も充実した時期であった。先生は『東亜連盟入門』に「大陸の同志数百万」と述べておられる。『東亜連盟』誌を読まれる方がたは、このような歴史理解においてこれを繙かれるよう希望する。